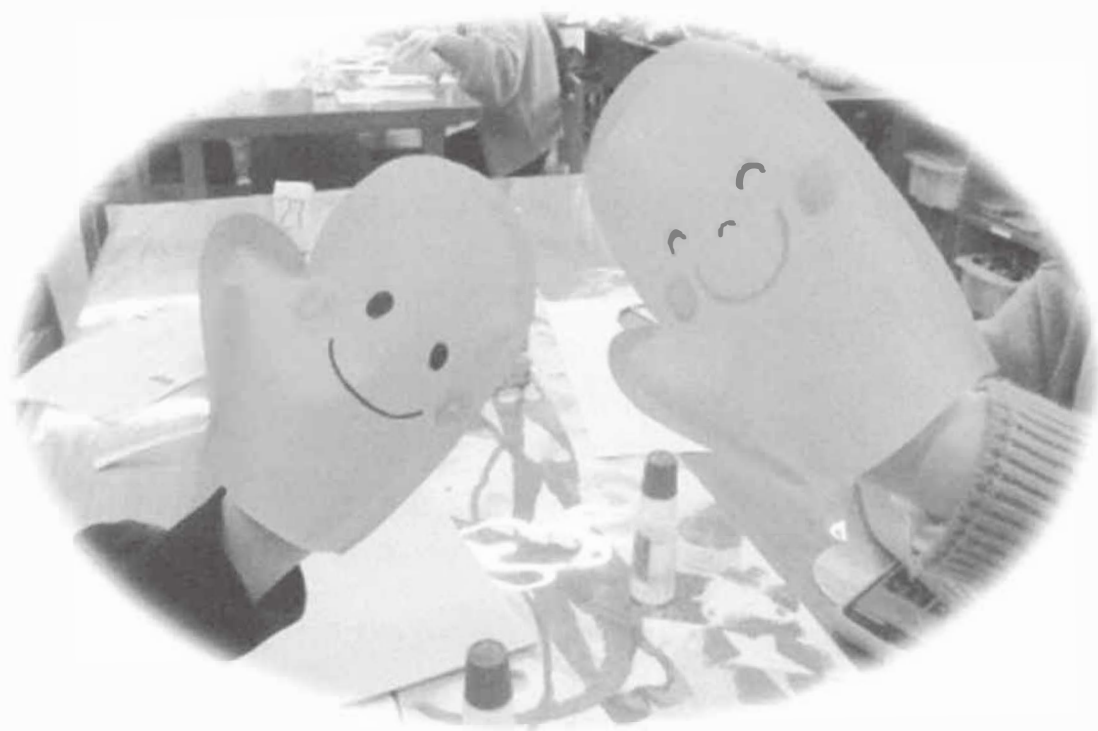


保育者養成実践論集 第7号



横浜創英大学

未来への橋渡し ～実習生との共育に寄せて～

著者 社会福祉法人足跡の会 理事長溝渕信一（座間ゆめっこ保育園・綾瀬ゆめっこ保育園）

I. 『未来を拓く力、ここに生まれる』

社会福祉法人足跡は、待機児童の解消に向けて、自治体が待機児童解消加速化プランを計画し、保育所の整備の取組みに対して支援を行うために、平成27年に誕生しました。その頃、私は保育所等を経営する社会福祉法人の経営再建に当たっており、自治体より私に要請があつて社会福祉法人の設立と同時に、綾瀬ゆめっこ保育園を開園いたしました。4年後、令和元年、座間ゆめっこ保育園を開園しました。この法人の前身は、平成12年に設立された特定非営利活動法人足跡の会で、青少年健全育成や、引きこもりの方の自立支援、身寄りのない方の骨の埋葬事業を行っており、社会福祉法人の設立時に事業移管され、現在も事業が引き継がれ、第1種事業の、生活困難者のための助葬事業や公益事業として、問題を抱える方の為の合祀墓地等の事業を積極的に行っています。社会福祉法人は、その高い公益性に鑑み、「社会福祉事業及び公益事業を行うに当たり、日常生活又は社会生活上の支援を必要とする者に対して、無料又は低額な料金を、福祉サービスを積極的に提供するよう努めなければならない」という責務が課されており、当法人は、地域の福祉ニーズ等を踏まえつつ、法人の自主性、創意工夫による多様な地域貢献活動が行われています。（第24条第2項）また私たち法人の保育施設は、本来の持つ保育機能を果たすだけでなく、全国的に非常に珍しい国家支援締結事項が結ばれています。綾瀬・座間にある保育園の地域には、海上自衛隊厚木航空基地・陸上自衛隊座間駐屯地が駐屯しており、自治体の災害派遣等が生じた際、自衛隊で共働きをする夫婦が、緊急登庁をせざるを得ない時、その隊員の未就学児を預かるという、家族支援が行われている事も、他園とは違う大きな特色と言えると思います。

II. 『未来の保育士へ実習が描く希望の道のり』

「保育実習」とは、皆さんに言うまでもありませんが、保育士養成課程で、資格を持たない学生の方が、保育現場で実際の体験を通して学ぶ活動であります。実習期間中、授業で学んだことを皆さんは保育施設で子どもたちの様子や保育士の援助を観察したり、保育に参加して現場体験を重ねていきますよね。私たちの法人の大きな目的は、人材育成への貢献です。子どもの人権・人格の尊重は、従前より、児童福祉の本来の理念であります。しかし、近年、子どもの気持ちに寄り添い、その人権・人格を尊重するという意識が、保護者や、保育に携わる者だけでなく、広く一般においても高まってきています。そうした子どもの人権に対する意識の高まりの中、かつては特段問題とは認識されていなかった行為や言動でも、より高度な配慮が求められるようになりました。だからこそ、保育に携わる私たちにとっては当たり前のことですが、これから保育に携わろうとする皆さんには、このような状況の変化も踏まえつつ、現状の子どもへの接し方が、子どもの人権・人格の尊重の観点に照らして適切な保育であるかをご自身でも考えてもらいたいと思っています。まさに世界はAIの時代に突入し、ロボット産業の時代で人はいらぬ時代になりつつあります。しかし、私たちの職場は間違いなくロボットではなく、私たち人間が人を創ります。私たちは、ロボットに創られるのではなく、上司に育てられ、同僚に励まされ、後輩を思いやる。時には同僚との保育の違いに思いを馳せるでしょう。だからこそ実習を思い出し、原点に戻り、初心に戻る、つまり、実習を思い出してほしいのです。皆さんが、崇高な職業という事に誇りを持ち、気付ける保育士になってもらいたいという願いで実習を受け入れています。

Ⅲ. 『実習生と一緒に新たな保育視点を探る』

実習生を受け入れ指導するという事は、私たち保育士の指導者として実習生に対する役割があるわけです。①園の方針や大切にしている事を伝える②実習生が安心して自分を出せる環境を用意する③指示は的確で最小限に④実習生の持ち味を引き出す働きかけを行う⑤自分が保育実習生だった時を振り返る⑥実習生から学ぶ姿勢を忘れない。など沢山の役割が存在すると考えています。実習生を指導するという事は私たち自分自身の保育の振り返りのチャンスであり、共に成長する事だとも考えています。

実習生がやってくると「教えてあげよう」という思いに捉われてしまいがちです。しかし、実習生から学ぶことがたくさんあるのです。たとえば、新しい手遊びや流行りの絵本を教えられることもあります。また、プロの保育士ではないからこそ、ありのままの視点で子どもたちを観察し、私たちが気づかなかったことを発見してくれる存在でもあります。短期間ではあるけれど、同じ保育現場に入った仲間として、実習生と意見交換をしてみたいと思っています。そして、私たちは実習生が来ると自分の学生時代を思い出します。まだまだ右も左も分からない時で、保育実習の経験は宝物です。自分が指導を担当することになった実習生が、自分を目標にしてくれたり、自分と働きたいとそんな風に思ってくれたらうれしく思います。私たちはそのような働きかけを目指したいものです。

しかし、私たちは幾度となく、ヒューマンエラーを起こし保育を振り返り、壁にぶち当たります。「過ぎたことは、もう戻れない」という人間の原則を忘れ、過ぎ去ったことをいつまでも気にせず、「次にはきっと・・・」という期待をもった保育に対する反省が大切です。失敗を責めるのではなく決定的な失敗をしないように、小さな失敗の時に「次にはどうすればよいか」をしっかり私たちと考えていきましょう。

Ⅳ. 『ゆとりのある保育』

「ゆとり」とは、余りがあることですが、主に「窮屈ではない」の意味合いで使われる言葉が多く、「時間」「空間」「気持ち」などあらゆる物事に使われ、保育計画のゆとり、保育室のゆとり、子どもや自分自身の心のゆとりと考えています。私たちは、何人もの各家庭のお子さんを受け入れていて、色々な世帯の形があり、事情を抱えているご家庭は少なくありません。まして、乳幼児期に発達に異常を感じ、異変に感じてきて、その保護者への対応や子どもを尊重した保育もしなければなりません。そこで、ゆとりを持つという保育をするには、乳幼児は、それぞれ違った発達の「個性」を持って生まれています。「〇歳児だから」と考えるのではなく、その子自身のペースを守り「じっくり」と経験して行ける環境が発育を促進します。大人が発達を「引っ張る」のではなく「付き添う」ところが大切です。また、乳幼児にとって、早くやらせようとする事も厳禁です。せっかくやる気になっていても、実際の行動に移るまでには、必ず準備期間が必要です。保育者は、その準備期間を保証しましょう。Ⅱの後段でも申し上げましたように、職場で働く皆さんは、上司に育てられ、同僚に励まされ、後輩を思いやる。時には、保護者から言われ、先輩から注意されていやな思いもする事でしょう。同僚との保育の違いに思いを馳せるでしょう。でもそんな時、同僚保育士は「あれっ何かあったかな？」って思いますよ。同僚だからこそ気付きます。ですから、マイナスの出来事は時間を置かず、メールではなく解決に至る話し合いが必要だと思います。いいですか、時間を置いてはいけません。そしてプラスの時は互いに褒めあい、励みにしましょう。そうすることで、心の余りが出来て、保育計画のゆとり、保育室のゆとり、子どもや自分自身の心のゆとりに繋がるのです。時間は平等に与えられています。しかし、私たち大人も、子どもも、一人ひとりによって個性は違いますので、乳幼児の様子をしっかり観て、焦らせないように「待つ」ことは、私たちの義務であり責任です。何か考えさせられますね。

V. 『堀井学園の人間力育成について』

横浜創英大学では、人間力を「社会を構成し運営するとともに、自立した一人の人間として力強く生きていくための総合的な力」と定義し、その養成について、学生に対する養成を行えないかという事です。学校法人堀井学園は、創設者である初代理事長堀井章一先生の「考えて行動のできる人」の育成を建学の精神に据え、昭和15年に創設されたことは十分に承知しております。「教育の根本義は、人間に『考える生活』の基礎を与えるものであり、人間は深く考えることによって、その生活行動に公正を失わず、自己の完成へ進むことができる」と述べられており、共感をいたしております。特に創英の特徴は、看護学部と、こども教育学部に特化した学部があり、これらの職務上、AIでは患者や子どもの家庭を管理する意味では、大いに活躍する場面もあるやもしれませんが、個の持つ、【愛や温もり】に勝るものなどあり得ません。そこで、人間力が高められる人材育成の養成を切に願うするものであります。①「知的能力的要素」主に学校教育を通じ得られる基礎学力や創造力を身に着ける事。②「社会・対人関係力的要素」他者を尊重したコミュニケーションスキルを身に着ける事③「自己制御的要素」①と②を十分に発揮するための意欲や忍耐力を身に着ける事。私たちの業界は、昨今マスコミ、保護者等周囲からも見られていて、重箱の隅を楊枝でほじくるような状態でやりずらい状況があります。今後は更なる、自分自身がきちんとセルフマネジメントでき、周囲と信頼性を築き、コミュニケーションを取る力が重要です。もちろん、専門スキルや高度な知識、高いコミュニケーション力は必要不可欠ではありますが、主体性はありながらも、多様な見方も出来る、「共感力」そして、自分自身の感情、価値観、行動、強み、弱みを深く理解できる「自己認識力」、自分の心身をきちんとマネジメントする力やアンガーマネジメント等の「自己管理能力」が必要です。どうか、横浜創英大学の教育に真の人間力の空間に踏み込んでいただけますと幸いです。

VI. 『敬愛する先生からの言葉を胸に』

～基本に立ち返って再スタートを切る～

私たちはマスコミとか、いろいろなメディアに映像や音声を切り貼りされ、つけられたいろいろな「垢(あか)」の部分で、不適切保育だと揶揄(やゆ)され、保護者も言ったもの勝ちみたいな風潮にあり、何が適切なのか不適切なのか、判断が出来ない状態でこころも病むことに直面するやもしれません。そんな時は、一番の基本をきちっと実行するという事に戻っていただければ、自然に親とのコミュニケーションも、子どもとのコミュニケーションも活性化するというふうに思っています。私の剣道の恩師は他界しました。先生は小学校の校長先生で色々なことを教えてくださいました先生です。その中でも繰り返し伝えられた言葉は「迷ったら基本に戻れ」という考え方です。こういう時代だからこそベーシックなものをもう一回きちっと見直す機会になっていただければ、それが本当に、寄り添うコミュニケーションづくりになるのだというふうに思います。最後に張り切り過ぎに注意してくださいね。まわりに対して気がつくことは良いことですが、自分のやるべきことをおろそかにしては本末転倒です。担任同士でも給食室においても、それぞれの役割分担があるので、まずは自分の仕事をしてから、手伝う内容や優先順位を聞いて動きましょう。保育士は子どもの行動を予測したり、まわりの必要を察して動くことがとても大切です。栄養士や調理員は子どもの栄養等を考え、クッキングの支度をしたり、特に衛生環境には配慮が必要です。季節や保育室調理室内外、人間関係など、身の回りの環境を、心の目で見ると心掛けてみましょう。結びに、自分の思いは、自分の意志として、伝えてほしいと思います。皆がではなく自分はどう思っているかであって、他の人の発言みたいな表現は誤解を生み、関係のない人まで巻き込むことになり、事が大きくなるケースがあります。私たちはチームで保育を行っています、どうぞご縁があった保育園・幼稚園に、長期にわたって就労をしていただきたいと思っております。